

研究ノート

## 高木仁三郎の研究

——宮沢賢治との関係を中心として——

齋藤 宣裕

### はじめに

東日本大震災から間もなく二年が経とうとしている。昨年九月に原子力規制委員会が発足したが、原発再稼働の可否については今後決定される新しい安全基準に基づくとしており、活断層の調査も含めて再稼働の判断には慎重な議論が必要とされている。また、昨年末の衆議院選挙では原発政策も主要な争点の一つとなったが、脱原発依存を掲げていたはずの新政権の安倍首相はすでに原発の新設にも含みを持たせる発言を行っており、経済の再生を最優先させているように思われる。

そのような状況の中で我々がこれからの原発問題を考えるにあたり、今改めて高木仁三郎氏に注目したい。高木氏は原子力技術の研究開発に携わったものの、その実状に疑問を感じ自由な見地から原子力行政に対して提言、分析を行なうことを目的として原子力産業から独立した「原子力資料情報室」を設立し、代表を務めた。一九九〇年代よりすでに地震によって原発への電力と水の供給が断絶した際の重大事故の可能性を指摘しており、その危険性を予見して対策の必要性を訴えるとともに脱原発を訴え続けた。今回の福島第一原発の事故によって、改めてその存在が注目さ

れている。また重要な点として、高木氏が設立した「原子力資料情報室」のことを自ら「わが羅須地人協会」と呼び、自身を宮澤賢治と重ね合わせていたことが挙げられる。本発表では高木氏が宮澤賢治と自らを重ね合わせ、何を目標していたのかを考え、これからの原発問題を考える上での一助としたい。

## 一、高木仁三郎について

高木氏は一九三八年（昭和十三年）群馬県前橋市で生まれ、群馬県立前橋高校を卒業後、東京大学理学部へと進学した。在学中には六十年安保闘争にも参加している。その後、一九六一年から日本原子力事業総合研究所核化学研究室（現在の日本原子力研究開発機構）に就職したが、そこでの熱心な研究が会社の方針と合わずに一九六五年に東京大学原子核研究所の助手へと転職をする。そしてここでの研究の中で、世界中で行なわれる核実験の影響によりいかにこの世界が放射線によって汚染されているかを知ることになる。

さらに研究が一段落して転換の契機を求めていた頃に声がかかり今度は一九六九年から東京立大学理学部化学科の助教授となった。この時、成田国際空港建設に反対する三里塚闘争に積極的に参加している。国家と農民との対立の中で、学問と向き合ってきた自分こそが農民たちの主張を大義として社会に認めさせる必要があると考えていた。そしてまた、この頃に宮澤賢治との出会いがあった。賢治が羅須地人協会の集案案内に書いた「われわれはどんな方法でわれわれに必要な科学をわれわれのものにできるか」という一文に高木氏は衝撃を受けた。それこそが当時、氏の直面していた問題そのものであったからである。

その後、教員を続ける意欲を失い大学を辞める決意を固めるが、とりあえず一年間ドイツのマックス・プランク核物理研究所へと留学することを決めた。そして一年後の一九七三年に都立大学を退職した。それからは翻訳の仕事をしながら三里塚にも通い続けたが、全国で原発建設ブームが起こる中、専門的知識を持つ一市民という立場から原発

反対運動に関わっていく。それと同時にプルトニウム問題を考える自主グループ「プルトニウム研究会」を組織した。この頃には全国に原発建設計画があり、それに反対する住民運動が活発化していた。それに伴い、その運動に協力していた専門家たちの間で、共通の資料室を作ろうという動きが生まれ、高木氏はその原子力資料情報室の専従世話人となった。原発を訴える中で、一九七九年のアメリカでのスリーマイル島原発事故、一九八六年のソ連のチェルノブイリ事故を経て、原発の是非が社会問題として取り上げられ、高木氏も度々メディアに登場するようになる。

一九九〇年と一九九一年には「脱原発法」の成立を目指して約三三〇万人分の署名を集め国会請願を行なったが、国会では全く無視され議論もされずに門前払いをされてしまった。この運動が失敗に終わったことや持病の腰痛が悪化したことなどから、高木氏はうつ病にかかってしまう。三ヶ月近くの休暇を取ることになり、そこで自らの営みは市民の目の高さからの科学、すなわち「市民の科学」を目指すことであることを再確認する。

活動に復帰してからは青森県六ヶ所村の核燃料サイクル施設の問題に取り組むとともに、海外での国際会議にも活躍の場を広げた。一九九七年には「もう一つのノーベル賞」と呼ばれる「ライト・ライブリフッド賞」を受賞するが、翌一九九八年には大腸がんが発覚。二〇〇〇年に六十二歳で亡くなった。

高木氏は一九九五年に発表した「核施設と非常事態——地震対策の検証を中心に——」（『日本物理学会誌』Vol.50）という論文において、地震と津波による核施設の危険性を指摘、阪神・淡路大震災は大きな警告を発していると述べているが、残念ながらその予見は三・一一の東日本大震災による福島原発事故によって現実のものとなってしまった。

## 二、高木仁三郎と宮澤賢治

高木氏は前述の通り都立大学の助教授時代に、詩人でドイツ文学者だった菅谷規矩雄氏から勧められて宮澤賢治作

品を改めて読み「われわれはどんな方法でわれわれに必要な科学をわれわれのものにできるか」という、賢治が羅須地人協会の集案案内に書いた一文と出会う。これは高木氏が当時直面していた問題そのものであり、四十年以上前に自分と同じ問題を抱えていたことに驚きと感動を覚えたという。

高木氏は賢治と自分とを重ね合わせていたところがあった。物理学者であり宮沢賢治イーハトーブ館前館長でもある齋藤文一氏は

そもそも賢治（一八九六～一九三三）と高木さん（一九三八～二〇〇〇）は、生まれは四十年ほどの違いもあり、各々の活動分野もまるで違っているように見えるが、じつはこの二人にははっきりした共通点があることに気がつく。たとえば二人の経歴、二人が置かれた時代の性格、両者の活動のスタイル、両者の持っていた内的な関心や意識などについてである。

（齋藤文一「高木仁三郎と宮澤賢治——二人の科学者」

『希望の未来へ 市民科学者・高木仁三郎の生き方』二〇〇四年 七つ森書館 一六三頁）

と述べている。賢治は質・古着商を営む裕福な家庭に生まれ、盛岡高等農林学校で学び、農学校の教師となるが約四年で退職し羅須地人協会を立ち上げる。一方、高木氏も開業医の家に生まれ、東京大学で学んだ後に研究所助手、大学助教授を短期間で辞職している。そして高木氏は原子力資料情報室を立ち上げるが、自ら

私はなにしろ、資料室にかかわることを決めた時点で、そこに全精力、おおげさでなく全人生をかけ、そこをわが「羅須地人協会」にするという気持ちになっていた

（高木仁三郎『市民科学者として生きる』一九九九年 岩波新書 一五〇頁）

と述べているように賢治の影響を多分に受けていた。

高木氏は賢治の『農民芸術概論綱要』の

宗教は疲れて近代科学に置換され然も科学は冷く暗い

芸術はいまわれらを離れ然もわびしく墮落した

いま宗教家芸術家とは真善若くは美を独占し販るものである

われらに購ふべき力もなく 又さるものを必要とせぬ

いまやわれらは新たに正しき道を行き われらの美を創らねばならぬ

（中略）

職業芸術家は一度亡びねばならぬ

誰人もみな芸術家たる感受をなせ

個性の優れる方面に於て各々止むなき表現をなせ

然もめいめいそのときどきの芸術家である。

（宮澤賢治「農民芸術概論綱要」『校本宮澤賢治全集』第十二卷上 一九七五年 筑摩書房 十頁）

という部分について

私はこれらの文章の芸術を科学に、職業芸術家を職業科学者に、美を真におきかえて、わがこととして読んだ。

極端な理想主義と言えばそれまでだが、今、自分もまた、理想主義に徹するしかないのではないか。「職業科学者は一度は亡びねばならぬ」と。(高木仁三郎『市民科学者として生きる』一九九九年 岩波新書 一二三頁)

と述べている。高木氏は日本原子力事業総合研究所核化学研究室の仕事で、会社の極端な原発推進、基礎研究不要の風潮に疑問を感じて辞め、都立大学助教授時代には成田国際空港建設に反対する三里塚闘争にも積極的に参加をしている。自らが「職業科学者」の地位に甘んじてしまうことへの葛藤から、そのような行動に出たとも考えられる。宮澤賢治もまた、農学校教師時代には学生には農業を勧めながらも、自らは教師として俸給を受け取って生活しているという矛盾、葛藤が原因となって教師を辞めて羅須地人協会の設立へと向かったのである。

高木氏は賢治のことを

科学をすることの苦悩を、あれほど実践的な領域に立ち入って表現している人を、

やっぱり私は知りません。

(高木仁三郎『宮澤賢治をめぐる冒険』二〇一一年 七つ森書館 一一〇頁)

このように評価している。自らと同じ疑問を持ち、同じように苦悩して羅須地人協会という形で答えを求めた宮澤賢治に対して自らを重ね合わせ、高木氏もまた答えを求め続けたといえる。

### 三、市民科学者とは

それでは賢治の考える羅須地人協会とはどのようなものだったのか。そして高木氏が考えた原子力資料情報室とは

どんなものであったのか。高木氏は次のように述べている。

賢治にとっての羅須地人協会というのはかならずしも、科学だけではなかったと思います。農民芸術ということ言っていたわけですし、それに反して、私の原子力資料情報室は芸術とは縁遠い。しかし、まあ賢治の農民芸術という言葉も、農民科学というふうにそのまま読み替えることができるくらいに、彼は科学についても思い入れもあったでしょうし、羅須地人協会についても、そのことで賢治なりの科学を実践として行うことが非常に大きな要素としてあったかと思うのです。私は私なりの科学を、大学とか企業の機関ではないところで、在野で行ってみたい。原子力の研究が在野でできるのか、というまったく当然の問いが周囲から圧倒的に寄せられるなかで私は大学を飛び出しました。私にもそれなりの高ぶった気持ちがあったわけです。そういう意味で、原子力資料情報室はわが羅須地人協会なのです。

（高木仁三郎『宮澤賢治をめぐる冒険』二〇一一年 七つ森書館 八七～八八頁）

賢治が「われわれはどんな方法でわれわれに必要な科学をわれわれのものにできるか」という自問に答えるために教職を辞めて羅須地人協会を設立し、そこで農民と同じ立場で農民芸術について実践したように、高木氏は「市民はどんな方法で市民に必要な科学を市民のものにできるか」ということを考えて、在野で市民と同じ立場の中で「科学」を行おうとしたのである。

そのことは高木氏の『雨ニモマケズ』の捉え方からも知ることができる。

しかし、私の知る限り、今の科学者たちはまず人間として涙を流し、オロオロするところから出発しようとし

ない。その前にすべてをデータとしてクールに受け止めてしまう。そこに今日の科学の原点にある問題がひそんでいるのではないか、と私は感じるのです。

(中略)

そして、そう思うようになってから「雨ニモマケズ」は私にとつていっそう重要なものとなりました。常にオロオロし、涙を流すところから、いわばその原点、その目の高さから科学をやっていきたい、それが私にとつても決意表明となったのです。

(高木仁三郎『宮澤賢治をめぐる冒険』二〇一一年 七つ森書館 一四八～一四九頁)

賢治の言うように「冷く暗い」現代の科学はあまりに冷静にすべてを捉えるが、そこに高木氏は疑問を感じていた。

そういう科学を考え直さなくちゃいけない。人間は自然を支配できると思っている。科学というのは自然を支配して自分の思うようにできると思ってきている。ところが実際はつくり出したものが思うようにならない部分  
が相当あって、そのことが次第に重荷になってきている。そこんところを考え直さなくちゃいけないんじゃない  
か、と思います。  
(高木仁三郎『科学とのつき合い方』一九八六年 河合文化教育研究所 三五頁)

科学は万能のものとして人々から信仰を集めてきたように見えたが、公害問題や環境問題、そして核の問題など新たな問題を次々と生み出し続けている。そこで科学者は中立的な立場からその問題をただ冷静にデータとして捉えるのではなく、実際に人々の中に入りその目線から物事を見聞きし、ともにオロオロし、ともに涙を流しながら一緒に考える必要があるのではないか、と考えたのである。専門的知識を持ちながらも市民の立場から問題を解決する手立

てを考えていく。これこそが高木氏の言う市民科学者の姿である。

#### 四、二人は何を目指したのか

賢治は羅須地人協会の活動によってイーハトーブを実現しようとしていた。イーハトーブとは賢治によると「ドリムランド」としての日本岩手県」であり、賢治の法華経信仰から鑑みれば、常寂光土ともいえるだろう。賢治は『農民芸術概論綱要』の中で「世界のまことの幸福」のためにこれから我々が何を論じるのかということについて「近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直観の一致に於て論じたい」と述べている。これはすなわち近代科学の力と宗教の力、そして我々の芸術とも言うべき各々の資質とを合わせて、これからの未来を考えていかなければならぬということであろう。賢治は「われらの前途は輝きながら峻峻である」としているが、科学と宗教、芸術との融合により輝く未来を目指したのではないだろうか。

一方、高木氏は

「市民の科学」がやるべきことは、未来への希望に基づいて科学を方向づけていくことである。未来が見えなくなった地球の将来に対して、未来への道筋をつけて、人々に希望を与えることである。

（高木仁三郎『市民科学者として生きる』一九九九年 岩波新書 一二五六頁）

このように述べ、市民の科学を通して先の見えなくなった現代の科学に対して方向を正すこと、新たな道筋を示して未来を与えるということを目指した。

また高木氏は一九九一年に浄土真宗大谷派金沢教務所にて行なった「科学の原理と人間の原理」という講演におい

て、次のように述べている。

例えば、私自身を突き動かしている衝動の一つの中に死者の・・・、私の場合は核の被害者の声をどれだけ自分の声にできるかという意識があります。ですから私はこの頃死者と共に生きるという生意気なことを言うのです。

(中略)

今未来の世代には我々は大変なものを残そうとしていますが、その未来の世代の声を今どうやって私達が発せられるのか。これは世代を超えた共生。死者との共生。未来との共生です。

最近、自然との共生は盛んに言われるようになってきましたが、それは私も言ってきた事ですが、そういう時間の流れ、宇宙的な広がりの中での共生、そういう概念の中で科学的な営みがどこまでできるのかというのが問われている。

(高木仁三郎『科学の原理と人間の原理

人間が天の火を盗んだ——その火の近くに生命はない』二〇一二年 方丈堂出版 八八～八九頁)

高木氏は市民科学者として市民とともに科学者として生きる中で、科学の犠牲となった人たちとともに生きようとしていた。そして過去の科学の犠牲者、死者と共生するとともに、負の遺産とも言うべき原子力を残してしまう未来の人たちとも共生していこうとした。それは単に科学と自然、自然と人間との共生ということではなく、時間の流れも超越した宇宙的規模の共生であろう。そしてそのつながりの中で、どれだけ科学の営みができるのかということを考えていたのである。

この時間の流れをも超越した共生とはまさに法華経の世界、あるいは賢治の『銀河鉄道の夜』の四次元世界の中の共生ということにつながるのではないだろうか。高木氏は科学と人間、自然と人間、生者と死者、それらの宇宙的広がりの中で共生を意識していた。

賢治は科学と宗教と芸術、高木氏は科学と人間、自然との共生を考えていた。世代を超えた原子力の大きな問題が起こり、科学の暗さ、冷たさが影を落とす今こそ科学と共に生きる宗教の力、自然の力、人間の力が必要ではないか。

## 五、「市民仏教者」として生きる

高木氏は都立大学の助教授を辞める決意をした際の心情について次のように振り返っている。

実験科学者である私は、私もまた象牙の塔の実験室の中ではなく、自らの社会的生活そのものを実験室とし、放射能の前にオロオロする漁民や、ブルドーザーの前にナミダヲナガす農民の不安を共有するところから出発するしかないだろう。

（高木仁三郎『市民科学者として生きる』一九九九年 岩波新書 一二四頁）

賢治が羅須地人協会によって目指したのはイーハトーブの実現、賢治の法華経信仰から鑑みればそれは常寂光土の実現、立正安国である。羅須地人協会での活動はまさに菩薩行であったといえる。前述のように高木氏は原子力資料情報室のことを「わが羅須地人協会」と呼び、その活動により脱原発を実現し新しい未来を実現しようとしていた。高木氏に法華経の信仰はなかったが、その姿は賢治と大いに重なる部分がある。

原子力の問題と対峙している今こそ我々仏教者も寺院から外に出て社会に交わり、市民と同じ立場から悩み・苦しみに寄り添い、オロオロしてナミダヲナガし、そして人々に道筋を示し希望を与えるべきではないか。このことに関

連して、茂田井教亨先生は「日蓮聖人の教えと公害問題」という対談の中で（もちろんここでは原発問題ではなく公害問題に関してではあるが）次のように述べている。

しかし、何としても安国論の冒頭にありますように、多くの人が災害で死んでゆく、それこそ屍が山をなすといったあの現状を目撃された聖人が、どうにも黙っていられなくなつて立ち上がられたという事実、これが大事なのですね。

一個の人間として、市民日蓮として、鎌倉の市民日蓮としておきかえてみれば、「独りこの事を愁えて胸憶に憤懣」したということばがあります。

（中略）

ただ政治的な、あるいはジャーナリスティックな問題としてわれわれがあげつらうのではなくて、一鎌倉市民日蓮がとつたあの気持を、われわれがもう一ぺんかみしめなくてはならないのではないか。それが宗徒として求められる第一のグルントではないか。

〔日蓮聖人の教えと公害問題〕『現代宗教研究』第六号 一九七三年 日蓮宗宗務院 三〇四頁

日蓮聖人が『立正安国論』を述作し、国家諫暁を行った動機には当時の地震・飢饉・疫病による惨状がある。このような災害を外側から単なる宗教者として見るのではなく、同じ街で生きる一人の人間として、外側からでなく内側から一人の市民としてその状況を見たということが大事なのだと述べている。

そしてそこで日蓮聖人はその惨状をどのように受け止められたのか。茂田井先生は『諫暁八幡抄』に出てくる「同一苦」の論理を挙げている。

「日蓮曰く一切衆生の同一の苦は悉くこれ日蓮一人の苦なりと申すべし」（定遺一八四七頁）

これは、宗祖の場合には、法華經にそむく、反法華、謗法による同一の苦というのですから、問題はきわめて法華經の教理とつながっていくけれど、この考え方は社会問題とすれば、一独占資本の、また、経済成長にだけ力こぶをいれたゆがめられた日本の発展のために人間の生命を害するということを無視するか、あるいは忘れてしまっているという問題。

〔日蓮聖人の教えと公害問題〕『現代宗教研究』第六号 一九七三年 日蓮宗宗務院 五頁）

この「同一苦」（同一の因による同一の苦）を日蓮聖人は代受苦、すなわち他人の苦しみを代わって受けるという菩薩行として実践された。他人の苦しみを自らの苦しみとして受け止める。例えば放射能の問題に苦しむ人に寄り添い、それを自分自身の苦しみとして受け止める。このような、いわば「市民仏教者」ともいえる姿勢こそ、原子力問題を抱えるこれからの時代に必要となるのではないだろうか。